

イザヤ書42章 「ふたりの主のしもべ」

1A 選ばれたしもべ 1-17

1B 真実なさばき 1-9

1C 国々に対する教え 1-4

2C 解き放たれる方 5-9

2B 救われる方 10-17

1C 鳥々の喜びの歌 10-12

2C 敵に対する力 13-17

2A 耳を傾けないしもべ 18-25

1B 略奪された民 18-22

2B 主ご自身による戒め 23-25

本文

イザヤ 42 章を開いてください。私たちは、イスラエルに対する神の救いの預言を読んでいます。背景は、バビロンに捕え移されているイスラエルの民に対して、主がキュロスを通して解放して、エルサレムに帰還させてくださることです。

前回、41 章で、主が東から出てくる者が、ことごとく国々を倒し、踏みにじっていくことを語っていました。それは、キュロスが王となり、周囲の国々を倒していくことを預言しています。しかし、イスラエルに対しては、その同じ出来事だけれども、全く異なる、良いご計画があることを教えています。他の国々にとっては、自分たちは踏みにじられることなのですが、イスラエルについては、キュロスがバビロンを倒すので、自分たちが解放される時になるのです。

そこで主が、イスラエルに対して語られた言葉は、「あなたはわたしのしもべ」です。「41:8 **だがイスラエルよ、あなたはわたしのしもべ。わたしが選んだヤコブよ、あなたは、わたしの友アブラハムの裔だ。**」主は、大いなるご計画を持っておられます。人々の思いをはるかに超えて、主はキュロスを選び、ユダヤ人を解放されるのです。周囲の国々は、人間的な考えで、いろんな方策を考えるのですが、イスラエルは、ただ主の言われることを信じて、主に命じられることを行うのです。素晴らしいご計画が用意されているのですから、その恵みに服するのです。それが、「**あなたはわたしのしもべ。わたしが選んだヤコブよ**」ということです。

イザヤの預言は、これから、「主のしもべ」ということばが多く出て来て、一つのテーマになっています。主のしもべは、イスラエルだけでなく、実は、メシアご自身もそう呼ばれるのです。イスラエルを救われる方は、イスラエルと一つになり、そこからイスラエルを率いて、救われるメシアを立てて

くださいます。そして、この方は、国々に対しても光とされます。すなわち、イエスが、約束のメシア、キリストであり、キリストにあって私たちもこの方の救いを受け取るのです。

1A 選ばれたしもべ 1-17

1B 真実なさばき 1-9

1C 国々に対する教え 1-4

1「見よ。わたしが支えるわたしのしもべ、わたしの心が喜ぶ、わたしの選んだ者。わたしは彼の上にわたしの霊を授け、彼は国々にさばきを行う。

主は、「見よ」という呼びかけから始めておられます。40 章 9 節でも、シオンからyび知らせを伝える者は、「見よ、あなたがたの神を」と呼びかけていました。

そして、「わたしが支えるわたしのしもべ」と言われていますね。神が支えておられる、しもべです。イエスご自身についての預言です。ピリピ 2 章 6 節には、「この方は神の御姿であられるのに、神としてのあり方を捨てられないとは考えず、ご自分を空しくして、しもべの姿を取り」と、あります。

そして、神はこのしもべの心を喜んでおられますね。それから、「わたしの選んだ者」と呼ばれています。何か、聞いたことのある言葉ではないですか？そうです、福音書で主イエスが、父なる神からそう呼ばれました。主がバプテスマを受けられた時です、「ルカ 3:22 聖霊が鳩のような形をして、イエスの上に降って来られた。すると、天から声がした。「あなたはわたしの愛する子。わたしはあなたを喜ぶ。」そして、高い山で主が御姿が変わった時のことです、「9:35 すると雲の中から言う声がした。「これはわたしの選んだ子。彼の言うことを聞け。」

そして、このしもべは、主の御霊を受けています。今、読んだように、イエスはバプテスマを受けられた時に、聖霊が鳩のような形をして、降ってこられました。そして、その御霊については、イザヤはすでに 11 章で預言していました。「11:1-2 エッサイの根株から新芽が生え、その根から若枝が出て実を結ぶ。その上に【主】の霊がとどまる。それは知恵と悟りの霊、思慮と力の霊、【主】を恐れる、知識の霊である。」物事を判断する霊ですね。知恵と悟り、思慮と力、そして何よりも主を恐れる霊であり、知識の霊です。

それで、主は、「国々にさばきを行う」とあります。主は、聖霊によって、イスラエルだけでなく、国々にまでさばきを行われます。このさばきとは、罰するという意味のさばきではなく、正しく治めるという意味でのさばきです。私たちはしばしば、旧約聖書はイスラエルの民のためのもの、新約は世界の国々のためのものという誤った分け方をします。いいえ、旧約の中にすでに、諸国へのメシアの働きが預言されています。そして、新約においても、異邦人への救いだけでなく、その後のイスラエルに対する救いによって、神の救いが完成することが書かれています。二つとも、同じ

神の贖いを啓示しているのです。

そして、話を「しもべ」に戻しますが、イスラエル人が神のしもべと呼ばれていますが、メシアは彼らと一つとなり、イスラエルの代表として、その理想としてのしもべになられているということです。イスラエルが選ばれましたが、この方も選ばれました。神の救いをもたらすために、神から油を注がれ、御霊の注ぎを受けているのです。そして、イスラエルが神の言うことに聞き、仕えますが、メシアの生涯は、まさに神に従い、神に聞いていく、しもべなのです。

² 彼は叫ばず、言い争わず、通りでその声を聞かせない。³ 傷んだ葦を折ることもなく、くすぶる灯芯を消すこともなく、真実をもってさばきを執り行う。⁴ 衰えず、くじけることなく、ついには地にさばきを確立する。島々もそのおしえを待ち望む。」

キュロスは、神に用いられるしもべですが、この主のしもべは、全く異なるかたちで、さばきを確立します。キュロスは、国々を踏みにじる形で征服していきます。「41:2 だれが一人の者を東から起こし、その行く先々で勝利を取めさせるのか。だれが彼の前に国々を渡し、王たちを踏みにじらせるのか。彼はその剣で彼らをちりのようにし、その弓で藁のように追い散らす。」しかし、主の選ばれたしもべは、叫ばず、言い争わず、通りでその声を聞かせません。傷んだ葦でさえ折ることせず、くすぶる灯の芯を消すこともありません。力ではなく、真実をもってさばきを執り行います。

この姿がイエスの宣教の中に見出されます。マタイ 12 章で、このイザヤの預言が成就するためであった、と書いてあります。イエス様が、次のことを行われたからです。「12:15-16 イエスはそれを知って、そこを立ち去られた。すると大勢の群衆がついて来たので、彼らをみな癒やされた。そして、ご自分のことを人々に知らせないように、彼らを戒められた。」そして、主は、十字架の死に至るまで、その姿勢を崩されませんでした。

そして、この方は「衰えず、くじけることなく」とあります。このように、小さき者たちに近づき、そこから立ち上がせ、支えていく働きは、ともすると、すぐになくなってしまふような働きです。また、忍耐しますし、多くの失敗も経験します。しかし、くじけることがないのです。だからこそ、他の力ある王たちが成し遂げた征服よりも、はるかに大きな影響力をもって、そのさばきが拡がったのです。「島々もそのおしえを待ち望む。」とありますね。地の果てまで、この極東、日本にまで、教えが届いているのです。何が、最も力を持つか、人々を治めることになるのか？というのを教えられます。

2C 解き放たれる方 5-9

⁵ 天を創造し、これを延べ広げ、地とその産物を押し広げ、その上にいる民に息を与え、そこを歩む者たちに霊を授けた神なる主は こう言われる。

主は、再び、ご自身が天地創造の偉大な神であることを示されます。40 章において、いかにご自身が大きいのかを示されました。そしてここは、それだけでなく、そこに命を与え、息を与え、霊を授ける方であることを示しています。私たち、また動物や植物も、そのいのちというのは、全く神の御手にゆだねられているのです。

⁶わたし、主は、義をもってあなたを召し、あなたの手を握る。あなたを見守り、あなたを民の契約として、国々の光とする。

主は、ご自身のしもべ、イスラエルに対して、こう語られていました。「41:10 わたしの義の右の手で、あなたを守る。」義の右の手で、イスラエルは守られます。イスラエル自身の義ではなく、神ご自身の義があって、神の力をもって守ってくださるということです。

そのイスラエルの代表、理想として召されているメシアは、「義をもってあなたを召」されています。しかしイスラエルとは異なり、この方はそもそも正しい方です。神から来られた方であり、正しい方です。そして、神の手によって握られています。イエスの生涯は、神の御手に守られ、見守られていたそれでありました。

その結果として、「あなたを民の契約として、国々の光とする。」と続くのです。民の契約とは、イスラエルとの契約です。それだけでなく、国々の光となるのです。イスラエルに届くだけでなく、その先、異邦人にも光となるという預言がここにあるのです。

この箇所を引用して、パウロは、ピシディアのアンティオキアで、パウロとバルナバは説教しました。そこで人々が大勢信じて、町中の人々が聞きに来ました。ところが、その群衆を見たユダヤ人たちはねたみに燃えて、反対し、彼らを口汚くののしりました。それで、この箇所を引用しました。「使 13:46-48 そこで、パウロとバルナバは大胆に語った。「神のことばは、まずあなたがたに語られなければなりません。しかし、あなたがたはそれを拒んで、自分自身を永遠のいのちにふさわしくない者にしています。ですから、見なさい、私たちはこれから異邦人たちの方に向かいます。主が私たちに、こう命じておられるからです。『わたしはあなたを異邦人の光とし、地の果てにまで救いをもたらす者とする。』」異邦人たちはこれを聞いて喜び、主のことばを賛美した。そして、永遠のいのちにあずかるように定められていた人たちはみな、信仰に入った。」

そして、イスラエルにとっての契約とは何でしょうか？それは、新しい契約です。これは異邦人と結ばれたものではありません。「エレ 31:31 見よ、その時代が来る——【主】のことば——。そのとき、わたしはイスラエルの家およびユダの家と、新しい契約を結ぶ。」このイスラエルとの契約が、キリストにあって異邦人にも及んだというのが、教会の姿です。

⁷ こうして、見えない目を開き、囚人を牢獄から、闇の中に住む者たちを獄屋から連れ出す。

イエスは、宣教の働きでこれらのことを行われました。見えない目を開かれました。そして、囚人については、霊的な縛りについても使われる表現です。すなわち悪霊につかれている者たちから悪霊を追い出されました。さらに、闇の中にいるというのは、死んでしまった者たちのことを言っているかもしれません。ヤイロの娘、ナインのやもめの息子、またラザロは、死んでいたのによみがえりました。

⁸ わたしは主、これがわたしの名。わたしは、わたしの栄光をほかの者に、わたしの栄光を、刻んだ像どもにも与えはしない。⁹ 初めのことは、見よ、すでに起こった。新しいことを、わたしは告げる。それが起こる前にあなたがたに聞かせる。」

神は、キュロス王が来ることを前もって伝えられたように、今ここで、メシアの働きを予め知らせることによって、ご自身のみが神であること、ほかの者に決して、この栄光を与えないことを決意しておられます。すでに神の中では、初めのことになっており、起こったこと。刻んだ像ども、と主は言われていますが、当時の世界で、神と言えは刻んだ像です。これらには決してできないことを行うことによって、全く彼らには新しいことを行われ、それで主が神であられることを顕されるのです。

「新しいこと」は、前例のないことです。私たちは、過去の事例によって現在を見ます。このことも、以前、このようなことが起こったから、やはり今回もそのようになるだろう、と考えます。しかし、そのようなものが何も当てはまらない、新しい働きなのです。ベテスダで足なえだった男は、「よくなりたいか？」と聞かれたのに、「主よ。水がかき回されたとき、池の中に入れてくれる人がいません。(ヨハネ5:7)」と答えました。今までがそうだったからと答え、過去を引っ張ってきました。しかし、主は、新しいことを行なわれたのです。私たちにも、主は新しいことをもって臨まれます。

2B 救われる方 10-17

1C 鳥々の喜びの歌 10-12

¹⁰ 新しい歌を主に歌え。その栄光を、地の果てから。海に下る者、そこを渡るすべての者、島々とそこに住む者よ。

主によって、新しい事が行なわれるのであれば、そこから出てくるものは新しい歌です。ここからの預言は、メシアが島々にまで、さばきを確立したという事の後で起こることです。つまり、イエス・キリストが、すべての人の罪のための十字架で死なれ、三日目によみがえり、天に昇られて、人々に御霊が注がれている中で起こっていると考えるといいでしょう。人々が御霊によって、新しく生まれ、そして新しい歌をうたっています。至るところで、主の栄光が歌われています。

¹¹ 荒野とその町々、ケダル人が住む村々よ、声をあげよ。セラに住む者たちは喜び歌え。山々の頂から声高らかに叫べ。¹² 主に栄光を帰せよ。島々にその栄誉を告げ知らせよ。

島々にまで栄誉が告げ知らされるのですが、イスラエルの周辺にも声が上がります。第一に、ケダルの人々から、声が上がっています。主はかつて、ケダルの者たちに対する裁きの宣言を行われました(21:16-17)。アラビア半島にいる遊牧民だったと考えられます。しかし主は、あきらめておられません。そのような人々に対しても働きかけ、その中から主に立ち帰る人々が起こされることを願っているのです。

第二に、セラの人々も同じです。そこはエドムの地です。エドムでは、神による永遠の裁きが定められていることが 34 章に書かれていました(6-7 節)。ですから、主がさばき行われると宣言したところに、キリストを遣わされたのです。ゆえに、どんな暗闇にいても、主はそこから解放することを望まれています。前例のない、新しいことを行われようとされているのです。

2C 敵に対する力 13-17

¹³ 主は勇士のように出で立ち、戦士のように激しく奮い立ち、ときの声をあげて叫び、敵に向かって力を見せつける。

あらゆる人々が、主の栄誉を歌っている、つまり今の教会の時代の後、主は力をもって、勇士のように戻ってきてくださいます。神の民の敵に対して戦われるのです。

¹⁴ 「久しく、わたしは黙っていた。静かにして自分を抑えていた。今は、子を産む女のようにうめき、激しい息づかいであえぐ。

主は、実に忍耐深い方で、人々が悔い改めて救われるように待っておられます。しかし、それがいつまでもそうだということではないのです。主は、時が来れば、福音に聞き従わない者たち、イスラエルに敵対する者たちに、容赦ない裁きを下されます。

それをここでは、「久しく、わたしは黙っていた。静かにして自分を抑えていた。」と表現しておられるのです。また、子を産む女にも喩えておられます。イエス様も、世の終わりの始まりは、産みの苦しみの始まりであると言われました。産みの痛みは、産めば、すべての激しい痛みを忘れる喜びが訪れます。主が来られることも同じです。私たちは、これからもっと多くの痛みを経ます。しかし、主が来られれば、その痛みを忘れるほどの栄光が用意されているのです。

¹⁵ わたしは山や丘を荒らし、そのすべての青草を枯らし、川を中州ばかりにし、沢を涸らす。

敵対する国々に対して、主はこれらの災いを下されます。黙示録 8 章には、七つのラツパの災いが啓示されており、御使いがラツパを吹けば、青草の三分の一が焼かれます。海の生き物の三分の一が死にます。川も三分の一が打たれて、水が飲めなくなります。そして月や太陽の明るさが三分の一になると書かれています。

¹⁶ わたしは目の見えない人に、知らない道を歩ませ、知らない通り道を行かせる。彼らの前で闇を光に、起伏のある地を平らにする。これらのことをわたしは行い、彼らを見捨てはしない。

主は、このような弱い人々に回復を与えられます。今まで虐げられていた人々、また知らされていない人々が、道を歩ませ、離散しているイスラエル人であれば、大路を通してエルサレムに帰還できるようにされます。主は、決して見捨てないと強調されます。

¹⁷ 彫像に抛り頼み、鑄像に向かって『あなたがたこそ私たちの神々』と言う者は、退けられて恥を見る。

まことの神を選んでいない人々は、何らかのかたちで偶像を持っています。神以外に頼っているものがあります。偶像礼拝の本質は、自分礼拝です。自分に都合の良いときにその神を信じています。そういった人々は、主が戻ってこられたら、さばかれて、恥を見るのです。

2A 耳を傾けないしもべ 18-25

1B 略奪された民 18-22

¹⁸ 耳の聞こえない者たちよ、聞け。目の見えない者たちよ、目を凝らして見よ。¹⁹ わたしのしもべほど目の見えない者が、だれかほかにいるだろうか。わたしが送る使者ほど耳の聞こえない者が、ほかにいるだろうか。わたしと和解した者のような目の見えない者、主のしもべのような目の見えない者が、だれかほかにいるだろうか。²⁰ あなたは多くを見ながら、心を留めない。耳が開いているのに、聞こうとしない。」

これは、主のしもべが来て、さばきが国々に行き渡り、島々も主の栄誉を歌い、それから主が敵に戦われるという幻も与えられました。ところが、もう一人のしもべ、肝心のイスラエルが、耳の聞こえない者のように、目の見えない者のようになってしまっているのです。

イエスがこの地上に来られて、確かに盲人の目を開け、悪霊につかれて囚われの身になっている人を解放し、死者をよみがえらせることもされました。しかし、肝心のイスラエル自身が、それに応答しなかったのです。例えば、カペナウムやベツサイダ、コラジンの町に対して、数々の力あるわざを行なわれたのに、悔い改めなかったことを嘆いておられます(マタイ 11:20-24)。20 節に書かれているように、多くを見ているのに、心に留めません。パウロが福音を伝えている時も、ユダ

ヤ人に覆いかかっていることを話しました。「Ⅱコリ 3:15 確かに今日まで、モーセの書が朗読されるときはいつでも、彼らの心には覆いが掛かっています。」もし私たちも、主が語られているのにそれを受け入れ、聞き従っていなければ、同じように心に覆いがかかっているような状態になります。

²¹ 主はご自分の義のために望まれた。みおしえを広め、これを輝かすことを。²² しかし、これは、かすめ奪われ略奪された民、彼らはみな穴の中に陥られ、獄屋に閉じ込められた。かすめ奪われても、助け出す者はなく、略奪されても、返せと言う者もない。

主が願われていたのは、ご自分の義を輝かすこと、教えを広めることであります。ところが、それに聞く耳をもたなかったのが、彼らは略奪されました。バビロンによって捕え移されます。また、イエス様の時代には彼らは、ローマに捕え移されました。

2B 主ご自身による戒め 23-25

²³ あなたがたのうち、だれがこれに耳を傾け、後々のために注意して聞くだろうか。²⁴ だれがヤコブを、奪い取る者に渡したのか。イスラエルを、かすめ奪う者に。それは主ではないか。私たちはこの方の前に罪ある者となり、主の道に歩もうとせず、そのおしえに聞き従わなかった。²⁵ そこで主は、憤ってこれに怒りを注ぎ、激しい戦いをこれに向けた。それがあたりを焼き尽くしても彼は悟らず、自分に燃えついても心に留めなかった。

バビロンやローマに奪い取られていったのは、他でもない主ご自身なのだということでもあります。ここの理解はとても大切です。エレミヤ書では、ユダの国においてバビロンの脅威にどう対抗するかということについては、大きな関心事でありました。しかし、主はバビロンを通して、実は自分自身が主のほうに向いているのかどうか、それを知ってほしいと願われていたのです。24 節の後半に、「この方の前に罪ある者」とあります。これらの災いを起こしているのはもちろん、この奪い取る者たちなのですが、しかし、それを積極的に許されているのは、主なる神ご自身なのです。

私たちは、このことに気づかないといけません。今、自分の周りで起こっていることについて、その事柄の是非々々を私たちが問うことが神の関心事ではないのです。むしろ、それらのことを神が起こるように許されているのは、私たちが主に立ち帰るため、みこころを行うためであります。

こうして、二人のしもべを見ました。一人は、メシアであり、その救いの広がりを見ました。しかし、もう一人のしもべ、イスラエルは、その恵みが見えていません。私たちも、同じ過ちを犯してしまうかもしれません。多くの恵みがあるのに、それに気づかない、あるいは信じていないのです。次回は、このように懲らしめを受けてしまっているイスラエルに対して、共にいて助け出す主の憐れみのわざを読んでいくこととなります。